

フロッピー入稿

フリーライター／エディタ 杉山 肇

このニューズレターの編集を担当するC先生より、学術書の電子編集というテーマで一文を草すよう求められ、弱っている。私の場合、師匠（西洋美術史）の本の制作をお手伝いしているうちに、他の方のものについても校正・校閲の過程で多少の関与をするようになったというのが実状であり、かねてお世話になっている本物の「編集者」の皆さんに比べると、所詮、私などは素人に過ぎないからである。ただ、「本物」の皆さんに比べ、編集の過程でPCをコキつかうという点において、わずかながら、この学会に属する皆さんの関心を引く点もあるだろうか。すなわち、私が対象とするのは「フロッピー入稿」された原稿がほとんどであり、また経験上、数百頁単位の「書籍」に限られる。そして、その原稿は最終的に印刷会社の電算写植によって出力される。よって、このフロッピー入稿に関する一人の「電子編集者」の愚痴を聞いていただくのが、この稿の主旨となってしまうだろう。

フロッピー入稿がいつごろから始まったのか、正確なところは知らない。私自身の場合は1987年頃、フロッピーを出す側として初体験した覚えがある。そのときは何も考えずにプリントアウトと一緒にワープロ専用機のリデータ・フロッピーをお渡ししただけだったが、担当の方からその老舗の文科系出版社では初めてのケースであると伺った。しかし、ゲラを校正する際に、バケ字か誤植かはわからないが、とにかく原文と違う文字があったことは確かで、もしかしたらフロッピーは使いものにならず、印刷会社の方で打ち直されたのかもしれない。また、そのころ、とある大手出版社ではワープロでプリントアウトした原稿は不可だ、という噂話を感心しながら聴いたように記憶している（今でもリポート・卒論は手書き以外不可の方も……）ので、一応、一般化したと言えるのは80年代半ばであろうか。現在では、手書きの原稿を受け取らない出版社もあるようだが。

ところで、フロッピー入稿のメリットは、1) 誤植削減、2) 制作コストと期間の削減、の2点に尽きるということに、ご異論はないと思う。しかし、実際に「電子編集」をしてみると、本当にフロッピー入稿はメリットなのか、疑問に感じることがある。

ひとつ目をこらしてほしい。「フロッピー入稿」、これのおかしいところがおわかりだろうか。そう、長音符「ー」であるべきところに全角ハイフン「—」が使っているのだが、フロント・エンド・プロセサの仕様によるものか、多くの方が気づかないまま使っておられる。ところがこれを「ー」に一括置換をしてしまうと、今度は「プレトナーウッズ体制」とか「人間——このおかしなもの——」とか、かえっておかしくなってしまう場合も出てくるので、編集の際は全文にわたってひとつひとつチェックしなくてはならない。この二者は、見た目がほとんど変わらない書体もあるのだが、注意深い読者ならば気がつく程度に異なっているのが普通だし、縦組では、写植の仕様で、全角ハイフンは横を向いたままとなる場合が多い。ほうっておくわけにはいかない。しかも、両者混在の原稿であることも多いのだが、その修正作業は電子データ上で「検索」機能（できれば正規表現のオプションをつけた）を駆使すればこそできることで、ゲラになってから眼で追うとしたら、これはいささかきびしい。ちなみに、上例で使った倍角ダッシュは新聞等では「—」で代用しているが、書籍では「——」と一本の直線で表現される。しかし、これはプレーンなテキストには無い。だからフロッピーでは、ブランクもしくは「=」でも入れていただいて、プリントアウトに赤字で指示していただければありがたいのである。

もうひとつ「字下げ」の例を挙げてみよう。引用や箇条書きなどで行頭から連続して数文字分下げる場合があるが、1行目はよいとして2行目以降どのように書かれるだろうか。多くの方が、行頭からその何文字分かのブランクを入れることによって処理しておられるが、その場合の行頭が「論理行頭」ではなく「表示行頭」である場合には編集上非常にやっかいである。ワープロ原稿を写植に移す際、たとえ行あたりの文字数を出来上がりに合わせていただいたとしても、実際には詰めなどの問題でどうしてもずれてしまう。そして、この場合は本来「表示行頭」にあったはずのブランクもずれてしまうわけであって、「□□□」といったものが文中に挨拶もなくまぎれこむわけである。これも全体を精査して修正する必要がある。

またフロッピー入稿を採用すると、ハードウェア／ソフトウェア操作の問題ばかりでなく、書籍制作の進行も従来とは異なるはずである。できればメリットを生かして時間と手間を省きたい。と、わが国は言霊の国とて、初校を真っ赤にしなくては気が済まない方も少なくないのだが、確かに手書きの原稿では、これは致し方ない習慣であったと思う。手で書いた文字と、活字や写植文字では文章からうける印象がことなり、著者が意図しなかったニュアンスなども生じてしまう場合があるからである。しかし、このフロッピーでもたらされた電子原稿の場合も、それを編集し、こちらのワープロやDTPで仮にプリントアウトしてゲラとしてお返しすると、なぜか赤化義務を励行する方が少なくない。そして、この真っ赤なゲラを直すのも、編集者の仕事となってしまふ。それをやりとりした果てに、ようやく本文は固まったので写植に入れ、最後の念校を出したつもりでいると、いままでのパーソナル・コンピュータ用のプリンタの出力では「気分が出なかった」方もいて、また盛大に赤い花を咲かせてくれることも……

しかし、こういったことにとらわれていると、次第に電子編集は編集ではなく、単なる字面そろえに墮す傾向がある。体裁にとらわれ、内容のことなど、どこかに吹っ飛んでしまうのだ。実をいうと、大きな印刷会社さんとはともかく、中規模程度の頁ものの印刷屋さんでは、執筆者から直接フロッピーを貰っても、結局は、社内で再打ち込みさせる場合が多いのだそうである。電子データをいじっているよりも、プリントアウトしたものからプロが打ち込んだほうが、本1冊分であっても、早いという。そして、そんなことだけを編集者がやっているのだとしたら、これは無駄以外の何ものでもない。

思うに、総称としての「ワープロ」は、まだ揺籃期にあるといってもよいのではなかろうか。たとえば、原稿をプレーンなテキスト・データでください、といっても、ローカルな機種／ソフト固有のデータを提出される方は多い。そして、そのフロッピーを何の機械で作って一体どんなデータを入れているのか、ラベルや付箋なども一切つけられていない場合がほとんどである。しかし、今現在「フロッピー入稿」をしている方々は、どのようにフロッピーの作成法を学ばれたかを考えると、やむを得ない、という気にもなる。私自身は大学生時代、自由選択科目で「電子計算機概論」の単位を取得したが、これはメインフレームでのプログラミングが主であった。その後学んだのは、自分で購入した、あるいは使用した、各マシン／各ソフトのマニュアルを中心とする知識である。しかし、これはローカルなものにすぎない。いわば、総論なしに各論の一部のみを勉強しているわけで、他の各論しか学んだことのない者と意思の疎通をはかろうとしても、うまくゆかないのは当たり前である。たとえば、体裁やJIS漢字水準外の文字などを表現するためにタグ付けを利用しようとしても、それは著者と編集が根気よく話し合い、データ制作手法についてのノウハウの共有を確認してからでないと、かえって混乱を招く結果となる。

だからいま、そういったローカルなものを超えた「統一基準」やノウハウの確立／体系化、

そして文筆にたずさわる人々の教育・再教育が必要だと思うのである。つい最近、日経MIXの某会議室で、JIS 漢字水準の選定基準や書体などについての話題が出て、この稿を書いている現在もスレッドは続いている。注意してみると、さまざまな分野の方が、いろいろなところで「規格化」に関心をもち、あるいは現にたずさわっておられるようである。それらが結集して、グローバルな規格として花開くことを心から期待したい。そしてその際、上例のような瑣末な、しかしある意味では真に基本的ともいうべきことどもに対する対応をも、忘れずに盛り込んでおいて欲しいと思うのである。

.....